

万葉仮名と朝鮮漢字音

——漢字文化の伝来に関して——

藤井茂利

はじめに

昭和五十年度の上代文学会の全国大会は五月十七日から三日間、鹿児島大学法文学部で行われた。この大会を鹿児島でという依頼があったのは昭和四十九年の四月下旬のことであった。重い腎炎、週三回の人工透析中の千田教授と私の二名が定員の国文学科では到底お引き受けする自信などなく、教授は辞退する検討を始められた。ところが或る日のこと教授は「歩行も満足に出来ぬ自分には他所での学会に出席することなど、もう不可能になったが、もしここで出来れば、久松先生にも、五味先生にもお会い出来る。一度お会いしてみたい。」と何か物思いにふけられる様子をして語られた。教授のこの言葉に感じて私は大会開催の準備にとりかかった。久松先生には是非ご出席していただくよう、本会の理事の先生を通してお願い申し上げた。

大会は成功裡に終った。教授は鹿児島で大会を開催し得

た幸福と、久松先生・五味先生にお会い出来た喜びを幾度となく、繰り返し繰り返し語っておられた。

その後、幾月も経たぬ今年三月久松先生は御逝去された。上代文学会では先生の追悼号の計画がなされ、私も原稿募集の案内を受けた。実はこの四月頃から千田教授の健康状態は芳しくなく、週三回の透析とは別に、十日毎に血の湿る胸水を八百cc注射器で抜き取っては二百ccの輸血をするという処置を受けておられた。五月下旬医師の判断で左肺にドレー(液体排出用のチューブ管)を入れ、溜る胸水を一時に二千ccも抜き取る手術を受けられた。その時は、呼吸困難、喘ぎ喘ぎ、途切れ途切れの会話しか出来ない状態となられた。一時元気を取り戻された或る日、追悼号のことが話題になり、「応募して鹿児島にお出で下さった御礼を久松先生に申し上げるべきであるが、自分にはもうその体力が残されていない。」と淋しそうに申し訳けなさそうに話された。鹿児島に赴任以来三年、公私・昼夜

の別なく教授に誠意を盡してきた私には、教授の久松先生に対してお気持が痛い程感じられた。そこで追悼号には、ともかく私が代って応募することにした。とは言え私は、万葉仮名を研究している点では「上代」に関係あっても「文学」とは凡そ無縁の者で、「上代文学」に論文を寄せることが果して適切であるのか迷い続け、幾度か辞退の連絡をしようと思ひ悩んだ。

ところで、いささか私事に亘るが、私は七月、教授のお勧めを戴いて、朝鮮漢字音研究のためソウル大学に出張していた。二日未明、ソウルのホテルに千田教授が夢に現れ、万葉集の講義を終えられた後、暫くの間私に論文のことで話をされた。私は何か激励を受けたようであった。突如、教授は倒れられ私の膝下で息を引きとられた。追悼論文のことを気にされて、遙々異国の地まで激励にお見え下さったのであろうか。翌三日、教授の容態は急変されたと言う。生への執拗な努力も空しく、午後八時五分永眠された。

六日の葬儀の折、私は教授に代って論文を寄せる決意を固めた。

この小論は、かかる経緯あつての執筆で、私の研究領域の關係上、本誌従来の内容からかなり傾向の異なるものになつてゐる。その点申し訳けなく思う次第であるが、どうか御寛恕を戴きたいと思つ。

万葉集卷一、卷二の歌は格調高い気品溢れる秀歌が集められているばかりでなく、各天皇ごとに歌が排列され、よく整理された編集がなされている。この巻々の表記法は所謂、音仮名による一字一音式表記の形式でなく、表意文字、表音文字が混用いられている。

ところで、こういう表記法が古朝鮮の新羅の郷歌の表記法に酷似していることは既に早くから指摘されていたが、この表記に関して最近、大野晋博士¹⁾は、

ああいう音と訓とをまぜて使うという方式は最初に朝鮮で成立して、それを日本に持ち込んで来て日本で真似て万葉がなを使っているという、別のもう一つの流れがある。だから直接中国を考えに入れた表記、これは字音のほうの問題であるし、それからやまとことばと漢字をまぜて、つまり音と訓とをまぜて使うという方式に関しては朝鮮から学んだという二つの流れが「万葉集」の中にはある。

という見解を示しておられる。古く推古朝遺文が朝鮮系渡来人の指導のもとに筆録されているのを始め、上代日本の文献の筆録には多かれ少かれ絶えず朝鮮系渡来人の影響があつたことから考えて、音訓併用の表記法に朝鮮の表記法の影響があつたとされる大野氏の指摘は適切であるように思われる。

しかし問題は字音の方にあるように思われる。大野氏は「字音は中国」と直ちに中国音との関連を考へておられるが、果し

て適切であるのか検討を要するように思われる。一般に文字による表記法を習得する場合、抽象的な「表記法」のみを学習・習得することは有り得ず文字も共に学習する筈であり、また逆に文字表記された具体的な文を通して「表記法」が獲得されていくものと考えられる。とすれば古代の日本で古朝鮮から習得したこの音訓併用の表記法の学習過程で、この表記法の指導を受けるに併って伝来した漢字がある筈である。その漢字音が具体的に如何なる字音であったのか、先ず問題にされなければならぬように思われる。

ところで、日本列島には印面・鏡面に刻まれた漢字が一世紀の頃から渡来していると言われているが、漢字を文字として意識して日本で使用し始めたのは——何時からと断定することは文献の皆無に等しい今日では困難であるが——恐らく朝鮮からの渡来人が頻繁になった五世紀後半から六世紀頃かと推定される。この渡来人達の持ち込んだ漢字音が結局は日本に定着していくことになると思われるが、これらの漢字音の推定は今日ではもう容易ならぬ状況にある。しかしこれらの字音の性格が究明されれば、古代日本文化の性格の解明にも繋っていくことになる重要な問題を含んでいるように思われる。

ところで、この渡来した漢字音解明のための方法として、今日伝えられている万葉仮名の字音と出来得る限り古い時代の朝鮮漢字音とを比較し、如何なる点で類似し、如何なる点で相違しているか考察してみるのも一つの方法であるように思われる。既に述べているように漢字は朝鮮系渡来人が日本に持ち込

んでいるが、この漢字音は中国音と全く同一のものととは到底考えられない。

ところで、日本古典文学大系本（以下大系本と略す）万葉集二の補注には、

七世紀になると、遺品は急激に増える。そこには、阿米アミ、久尔意斯波羅支比里尔波弥己等（人名）、等已弥居加斯支トモミケカシ、夜比弥乃弥己等（人名）などの固有名詞がある。ここに使われている万葉仮名は、後世の漢字の字音では理解出来ないようなものが少なくない。例えば奇・宜・義・居・侈・止・弥・移などである。これは、さきの魏誌倭人伝に使われていた弥・台・奴などと同じように漢・魏の頃の中国の字音によったものである。こうした書き方は、漢の時代にサンスクリットを音訳した方法が、漢文化とともに朝鮮に広まり、朝鮮の言語を書き写した時に用いた文字を、そのまま伝えて日本の固有名詞を書くようになったもので、その結果、漢・魏の頃の字音がかかるかに数百年後の日本で使われることになったのである。

と述べている。この意見によると朝鮮に伝った漢・魏音自体は何の音変化もせず朝鮮の言語を写し、その音が不変のまま日本に伝えられたとされている。しかし、朝鮮に伝えられた漢字音は、朝鮮語の影響をも受けて朝鮮化され、朝鮮字音の体系が組み立てられている筈である。或る漢字が一見中国の或る時代の字音に源流が求められたとしても、朝鮮音化され、朝鮮音の体系の中にあれば朝鮮音として扱われるべきであろう。

推古朝遺文の奇、己・止などの漢字も一見漢・魏音に類似していてもこの記録を指導した朝鮮系渡来人達の持っていた字音体系のものであり、自らの体系中の字音を日本語表記に選んだと考えることが出来るであろう。先に推古朝遺文は朝鮮系渡来人の指導によったと述べたが、この中でも百済国と特に関連を持った記録には百済系の渡来人が筆録に関係しているわけで、そこに用いられた字音は百済国の字音体系中のものと考えよう。

ところで、大系本万葉集二の補注は、更に、

中国においては、時代が移るとともに同じ文字でもその発音が次第に変化し、三国六朝の頃には漢・魏とはかなり違った発音になっていた。日本はその頃百済を仲介として楊子江下流地域の呉の国などと文化的な交渉を持ったので、その地方の、その時代の発音が日本にひろく行きわたるようになった。

古事記の仮名は、大体において楊子江下流地域の三国六朝時代の発音を根拠としている。この発音は、日本では呉音と呼ばれているものと大体において一致する。万葉集の仮名もおおむねこの古事記と同系統の字音によっている。しかし日本書紀の仮名は、当時都の置かれた唐の長安の発音に近い西北方言の字音をよりどころとしていて、古事記・万葉集の字音とは相違するところがかなり大きい。これは後にいわゆる漢音に近い。この字音は朝廷で学習を奨励したが、それ以前に入っていて一般に行きわたっていた

南方系の字音である呉音を駆逐することは出来ず、あまりひろく行きわたらなかつた。

と述べている。しかし楊子江下流地域の字音が呉音として渡来し、これを基底に古事記・万葉の仮名が成立しているとするのは問題があるように思われる。既に指摘したことのある通り^③、例えば「宗」の漢字は、

宗我稲目（上宮聖徳法王帝説） 宗賀稲目（古事記）

宗我乃河原（万葉集三〇八七） 志留波乃伊宗（万葉集四三二四）

などの音仮名の用例が見られるが、「宗」の漢字音は、

漢音 ソウ 呉音 シウ 朝鮮漢字音 $(tʃoŋ)$ で、時代的に考えて漢音による仮名が考えられない法王帝説に「宗」が用いられている。また「呉音」を主とすべき筈の万葉集の仮名に

「漢音」が基底となっていて、大系本の補注の説と事実関係は相違している。「宗」に「そ」音を求めるならば、当然朝鮮音に注目しなければならぬであろう。

「容」「用」の漢音はヨウ、呉音はユウ

であるが、「佐容比売」（万葉集八八三）、「阿用久」（万葉集・四三九〇）、「吉用伎」（万葉集・四四六五）、「奈用竹乃」（万葉集・二一七）、「用流」（万葉集・八〇七）など仮名の用例が多数見られる。「宗」の場合と同様、朝鮮音が基底となっていると思われる。

とすれば「呉音」が古事記・万葉の仮名の基底になっているとは必ずしも言えず、他に基底になるべき音が存するの調査してみなければならぬ。

ここで万葉集卷一・卷二の音仮名として用いられている漢字の漢音・呉音・朝鮮音を比較してみることにする。卷一・二を取り上げたのは、この卷々が比較的古い時期に編集され、古い時代の歌が多くまた朝鮮の影響を受けた表音文字・表意文字の混用の表現形式の巻であるからである。

なおカタカナ書きの右側は漢音、左側は呉音である。

枯 <small>(甲)ゴ</small> ク	高 <small>(甲)カウ</small> コウ	監 <small>(甲)カイン</small> カン	計 <small>(甲)ケイ</small> ケイ	君 <small>(ク)クン</small> クン	騎 <small>(乙)キ</small> キ	吉 <small>(甲)キツ</small> キツ	我 <small>(ガ)ガ</small> ガ	閑 <small>(カ)カン</small> カン	加 <small>(カ)カ</small> カ	於 <small>(オ)オ</small> オ	宇 <small>(ウ)ウ</small> ウ	阿 <small>(ア)ア</small> ア
高 <small>(甲)カウ</small> コウ	高 <small>(甲)カウ</small> コウ	監 <small>(甲)カイン</small> カン	計 <small>(甲)ケイ</small> ケイ	君 <small>(ク)クン</small> クン	騎 <small>(乙)キ</small> キ	吉 <small>(甲)キツ</small> キツ	我 <small>(ガ)ガ</small> ガ	閑 <small>(カ)カン</small> カン	加 <small>(カ)カ</small> カ	於 <small>(オ)オ</small> オ	宇 <small>(ウ)ウ</small> ウ	阿 <small>(ア)ア</small> ア
胡 <small>(甲)ゴ</small> ゴ	枯 <small>(甲)ゴ</small> ゴ	宜 <small>(乙)ギ</small> ギ	家 <small>(甲)ケ</small> ケ	丘 <small>(ク)ク</small> ク	苦 <small>(ク)ク</small> ク	藝 <small>(甲)ゲイ</small> ゲイ	伎 <small>(甲)ギ</small> ギ	何 <small>(カ)ガ</small> ガ	可 <small>(カ)カ</small> カ	雲 <small>(ウ)ウン</small> ウン	安 <small>(ア)アン</small> アン	
胡 <small>(甲)ゴ</small> ゴ	枯 <small>(甲)ゴ</small> ゴ	宜 <small>(乙)ギ</small> ギ	家 <small>(甲)ケ</small> ケ	丘 <small>(ク)ク</small> ク	苦 <small>(ク)ク</small> ク	藝 <small>(甲)ゲイ</small> ゲイ	伎 <small>(甲)ギ</small> ギ	何 <small>(カ)ガ</small> ガ	可 <small>(カ)カ</small> カ	雲 <small>(ウ)ウン</small> ウン	安 <small>(ア)アン</small> アン	
眞 <small>(甲)ゴ</small> ゴ	孤 <small>(甲)ゴ</small> ゴ	氣 <small>(乙)ケ</small> ケ	價 <small>(甲)ケ</small> ケ	具 <small>(ク)ク</small> ク	久 <small>(ク)ク</small> ク	疑 <small>(乙)ギ</small> ギ	岐 <small>(甲)ギ</small> ギ	香 <small>(カ)キヤウ</small> キヤウ	賀 <small>(ガ)ガ</small> ガ	衣 <small>(エ)エイ</small> エイ	伊 <small>(イ)イ</small> イ	
眞 <small>(甲)ゴ</small> ゴ	孤 <small>(甲)ゴ</small> ゴ	氣 <small>(乙)ケ</small> ケ	價 <small>(甲)ケ</small> ケ	具 <small>(ク)ク</small> ク	久 <small>(ク)ク</small> ク	疑 <small>(乙)ギ</small> ギ	岐 <small>(甲)ギ</small> ギ	香 <small>(カ)キヤウ</small> キヤウ	賀 <small>(ガ)ガ</small> ガ	衣 <small>(エ)エイ</small> エイ	伊 <small>(イ)イ</small> イ	
ウ <small>(ウ)ウ</small> ウ	高 <small>(甲)カウ</small> コウ	計 <small>(甲)ケイ</small> ケイ	家 <small>(甲)ケ</small> ケ	丘 <small>(ク)ク</small> ク	久 <small>(ク)ク</small> ク	疑 <small>(乙)ギ</small> ギ	岐 <small>(甲)ギ</small> ギ	香 <small>(カ)キヤウ</small> キヤウ	賀 <small>(ガ)ガ</small> ガ	衣 <small>(エ)エイ</small> エイ	伊 <small>(イ)イ</small> イ	
ウ <small>(ウ)ウ</small> ウ	高 <small>(甲)カウ</small> コウ	計 <small>(甲)ケイ</small> ケイ	家 <small>(甲)ケ</small> ケ	丘 <small>(ク)ク</small> ク	久 <small>(ク)ク</small> ク	疑 <small>(乙)ギ</small> ギ	岐 <small>(甲)ギ</small> ギ	香 <small>(カ)キヤウ</small> キヤウ	賀 <small>(ガ)ガ</small> ガ	衣 <small>(エ)エイ</small> エイ	伊 <small>(イ)イ</small> イ	

南 <small>(ナ)ナン</small> ナン	奈 <small>(ナ)ナイ</small> ナイ	騰 <small>(乙)トウ</small> トウ	等 <small>(乙)トウ</small> トウ	代 <small>(デ)ダイ</small> ダイ	都 <small>(ツ)ツ</small> ツ	治 <small>(チ)チ</small> チ	陀 <small>(ダ)ダ</small> ダ	多 <small>(タ)タ</small> タ	敝 <small>(乙)シヨ</small> シヨ	蘇 <small>(甲)ソ</small> ソ	受 <small>(ズ)ジュ</small> ジュ	自 <small>(ジ)ジ</small> ジ	死 <small>(シ)シ</small> シ	斯 <small>(シ)シ</small> シ	之 <small>(シ)シ</small> シ	紗 <small>(サ)サ</small> サ	左 <small>(サ)サ</small> サ	虚 <small>(乙)キヨ</small> キヨ	己 <small>(乙)キ</small> キ
南 <small>(ナ)ナン</small> ナン	奈 <small>(ナ)ナイ</small> ナイ	騰 <small>(乙)トウ</small> トウ	等 <small>(乙)トウ</small> トウ	代 <small>(デ)ダイ</small> ダイ	都 <small>(ツ)ツ</small> ツ	治 <small>(チ)チ</small> チ	陀 <small>(ダ)ダ</small> ダ	多 <small>(タ)タ</small> タ	敝 <small>(乙)シヨ</small> シヨ	蘇 <small>(甲)ソ</small> ソ	受 <small>(ズ)ジュ</small> ジュ	自 <small>(ジ)ジ</small> ジ	死 <small>(シ)シ</small> シ	斯 <small>(シ)シ</small> シ	之 <small>(シ)シ</small> シ	紗 <small>(サ)サ</small> サ	左 <small>(サ)サ</small> サ	虚 <small>(乙)キヨ</small> キヨ	己 <small>(乙)キ</small> キ
爾 <small>(ニ)ニ</small> ニ	寧 <small>(ネ)ナイ</small> ナイ	杼 <small>(乙)チヨ</small> チヨ	登 <small>(乙)トウ</small> トウ	侶 <small>(テ)タイ</small> タイ	呂 <small>(レ)レイ</small> レイ	追 <small>(ツ)ツキ</small> ツキ	太 <small>(ダ)ダイ</small> ダイ	他 <small>(タ)タ</small> タ	賊 <small>(乙)ソク</small> ソク	曾 <small>(乙)ソウ</small> ソウ	世 <small>(セ)セイ</small> セイ	須 <small>(ス)シュ</small> シュ	四 <small>(シ)シ</small> シ	師 <small>(シ)シ</small> シ	志 <small>(シ)シ</small> シ	散 <small>(サン)サン</small> サン	佐 <small>(サ)サ</small> サ	期 <small>(乙)キ</small> キ	巨 <small>(乙)キヨ</small> キヨ
爾 <small>(ニ)ニ</small> ニ	寧 <small>(ネ)ナイ</small> ナイ	杼 <small>(乙)チヨ</small> チヨ	登 <small>(乙)トウ</small> トウ	侶 <small>(テ)タイ</small> タイ	呂 <small>(レ)レイ</small> レイ	追 <small>(ツ)ツキ</small> ツキ	太 <small>(ダ)ダイ</small> ダイ	他 <small>(タ)タ</small> タ	賊 <small>(乙)ソク</small> ソク	曾 <small>(乙)ソウ</small> ソウ	世 <small>(セ)セイ</small> セイ	須 <small>(ス)シュ</small> シュ	四 <small>(シ)シ</small> シ	師 <small>(シ)シ</small> シ	志 <small>(シ)シ</small> シ	散 <small>(サン)サン</small> サン	佐 <small>(サ)サ</small> サ	期 <small>(乙)キ</small> キ	巨 <small>(乙)キヨ</small> キヨ
迹 <small>(ニ)ニ</small> ニ	難 <small>(ナ)ナン</small> ナン	澄 <small>(乙)チヨウ</small> チヨウ	泥 <small>(デ)ナイ</small> ナイ	天 <small>(テ)テン</small> テン	豆 <small>(ツ)ドウ</small> ドウ	知 <small>(チ)チ</small> チ	大 <small>(ダ)ダイ</small> ダイ	所 <small>(乙)ソ</small> ソ	勢 <small>(セ)セイ</small> セイ	珠 <small>(ジュ)ジュ</small> ジュ	信 <small>(シン)シン</small> シン	旨 <small>(シ)シ</small> シ	思 <small>(シ)シ</small> シ	射 <small>(シ)シ</small> シ	作 <small>(サク)サク</small> サク	碁 <small>(乙)キ</small> キ	許 <small>(乙)キヨ</small> キヨ		
迹 <small>(ニ)ニ</small> ニ	難 <small>(ナ)ナン</small> ナン	澄 <small>(乙)チヨウ</small> チヨウ	泥 <small>(デ)ナイ</small> ナイ	天 <small>(テ)テン</small> テン	豆 <small>(ツ)ドウ</small> ドウ	知 <small>(チ)チ</small> チ	大 <small>(ダ)ダイ</small> ダイ	所 <small>(乙)ソ</small> ソ	勢 <small>(セ)セイ</small> セイ	珠 <small>(ジュ)ジュ</small> ジュ	信 <small>(シン)シン</small> シン	旨 <small>(シ)シ</small> シ	思 <small>(シ)シ</small> シ	射 <small>(シ)シ</small> シ	作 <small>(サク)サク</small> サク	碁 <small>(乙)キ</small> キ	許 <small>(乙)キヨ</small> キヨ		
イ <small>(イ)イ</small> イ	難 <small>(ナ)ナン</small> ナン	澄 <small>(乙)チヨウ</small> チヨウ	泥 <small>(デ)ナイ</small> ナイ	天 <small>(テ)テン</small> テン	豆 <small>(ツ)ドウ</small> ドウ	知 <small>(チ)チ</small> チ	大 <small>(ダ)ダイ</small> ダイ	所 <small>(乙)ソ</small> ソ	勢 <small>(セ)セイ</small> セイ	珠 <small>(ジュ)ジュ</small> ジュ	信 <small>(シン)シン</small> シン	旨 <small>(シ)シ</small> シ	思 <small>(シ)シ</small> シ	射 <small>(シ)シ</small> シ	作 <small>(サク)サク</small> サク	碁 <small>(乙)キ</small> キ	許 <small>(乙)キヨ</small> キヨ		
イ <small>(イ)イ</small> イ	難 <small>(ナ)ナン</small> ナン	澄 <small>(乙)チヨウ</small> チヨウ	泥 <small>(デ)ナイ</small> ナイ	天 <small>(テ)テン</small> テン	豆 <small>(ツ)ドウ</small> ドウ	知 <small>(チ)チ</small> チ	大 <small>(ダ)ダイ</small> ダイ	所 <small>(乙)ソ</small> ソ	勢 <small>(セ)セイ</small> セイ	珠 <small>(ジュ)ジュ</small> ジュ	信 <small>(シン)シン</small> シン	旨 <small>(シ)シ</small> シ	思 <small>(シ)シ</small> シ	射 <small>(シ)シ</small> シ	作 <small>(サク)サク</small> サク	碁 <small>(乙)キ</small> キ	許 <small>(乙)キヨ</small> キヨ		

良(ら)リヤウ	欲(よ)ユク	遊(ゆ)ユウ	夜(や)ヤ	文(も)モン	母(も)モウ	賣(め)マイ	武(む)ム	弥(み)ミ	麻(ま)マ	倍(べ)バイ	部(べ)ブ	夫(ぶ)フ	備(び)ビ	比(ひ)ヒ	波(は)ハ	能(の)ノウ	柶(ね)ナイ	濃(の)ニウ	二(に)ジ
랑(rang)	욕(jok)	유(ju)	야(ja)	문(mun)	모(mo)	매(me)	무(mu)	미(mi)	마(ma)	배(pae)	부(bu)	부(bu)	비(fi)	비(fi)	파(pa)	능(neg)	네(ne)	농(nog)	이(ri)
樂(ら)ラク	余(よ)ヨ	要(え)エウ	也(や)ヤ	方(も)モウ	聞(も)モン	米(め)マイ	無(む)ム	味(み)ミ	万(ま)マン	保(ほ)ハウ	邊(へ)ヘン	扶(ぶ)フ	布(ふ)フ	鼻(び)ヒ	播(は)ハ	乃(の)ナイ	怒(の)ヌ	奴(ぬ)ヌ	日(に)ジツ
악(rak)	여(jo)	요(jo)	야(ja)	방(fag)	문(mun)	미(mi)	무(mu)	미(mi)	만(man)	보(po)	변(pion)	부(bu)	포(po)	비(fi)	파(pa)	내(nae)	노(no)	노(no)	일(gir)
利(り)リ	与(よ)ヨ	用(よ)ユウ	由(ゆ)ユウ	問(も)モン	問(も)モン	牟(む)ム	牟(む)ム	未(み)ミ	美(み)ミ	寶(ほ)ハウ	便(へ)ヘン	敵(へ)ヘイ	不(ふ)フツ	悲(ひ)ヒ	婆(ぼ)バ	泣(な)ナイ	努(の)ヌ	年(ね)ネン	仁(に)ニン
리(ri)	여(jo)	용(jog)	유(ju)	문(mun)	문(mun)	모(mo)	모(mc)	미(mi)	미(mi)	보(po)	편(pion)	폐(pie)	불(fur)	비(fi)	파(pa)	노(no)	년(njon)	년(njon)	인(gin)

以上の比較によると、万葉仮名の基底になった音は、「呉音」と結びつく様相を確かに示している。しかしその「呉音」は同時に、多少の例外はあるにしても、朝鮮音とも結びつく様相も呈している。また万葉仮名の中に「漢音」と類似している漢字が、先に指摘した宗・用・容以外にも見出せる。閑・加・計・孤・紗・枯・怒・努・也・欲・礼などがそうであるが、この「漢音」は朝鮮音と類似した音相をしており、はなはだ示唆に富んだ現象を示している。

三

万葉仮名の中には、「漢音」にも「呉音」にも類似の見られないものがある。芸(ぎ)グイ・宜(ぎ)キ・己(こ)キ・期(キ)キ・基(キ)キ・代(で)ダイ・澄(と)テウウ・濃(ぬ)ニウウ・柶(ね)ナイ・乃(の)ノイ・麻(ま)マ・呼(を)コ・平(を)コなどがそれである。

己・期(基)については、既に指摘した通り朝鮮音「コ」が基底になって、日本語を表記する仮名になったと考えること

が出来るであろう。⁽⁵⁾そしてこの用法は恐らく百済系渡来人によって定着したものと推定することが可能であろう。

「澄」「濃」(農)についても既に指摘している通りであるので、その他の漢字について朝鮮音との関連について述べておきたい。

「芸」の漢字は韻鏡で「外転十五開、牙音、清濁去声四等」に属しており「ゲイ」の音相になり、「ギ(甲)」の仮名として使用される説明が困難である。大野透氏は「介母音と尾母音の(i)及び頭子音の影響で主母音が狭化して芸がギ甲の仮名に適する原音を有し得たのであろう」と説明されたが、この説明では同韻同等の漢字「蔽」が「ひ」にならず「へ」として用いられる現象を説明し得ないと思われる。朝鮮音は「pie」であるので母音の狭化の説明が不要で、「pie」の音が「ギ」の仮名として用いられたと考えられる。しかし古朝鮮では人名「久麻芸」(耽羅人天智紀) 萊州司馬王芸本(三國史記七)の用例が見える程度で使用頻度は多くは見られない。

「麻」は、漢音・呉音による限り音仮名「ま」として用いられる説明は困難であるが、朝鮮音によれば容易に説明し得る。推古朝遺文には、

- 有麻移刀等弥弥乃弥已等 (元興寺露盤銘)
- 瓦師麻那父奴 昔麻帝弥 () ()
- 東漢大費直名麻高垢鬼 () ()
- 阿沙都麻首 () ()
- 斯掃斯麻 (元興寺丈六仏光背銘)

斯掃斯麻 (天寿国曼荼羅繡帳銘)

蕪奈久羅乃布等多麻斯岐乃弥已等 () ()

椋部奏久麻 () ()

弟比弥麻和加 (上宮記逸文) 母母思己麻和加中比弥 () ()

麻和加介兒 () ()

麻里古王 () ()

と見えて古く「麻」の仮名は伝来している。書紀には、

- 毛麻叱智 (新羅人・神功紀)、職麻那加比跪 (百濟記・神功紀)、伊羅麻酒 (百濟記・加羅人・神功紀)、久麻那利 (任那地名・雄略紀)、斯麻王 (百濟新撰・百濟王・武烈紀)、麻那君 (百濟將軍・武烈紀)、久羅麻致支爾 (百濟本記・繼体紀)、意斯移麻岐爾 (百濟本記・繼体紀)、麻須比・麻且爰 (地名・繼体紀)、不麻甲背 (百濟人・繼体紀)、麻那甲背 (百濟人・繼体紀)、麻齒 (百濟人・繼体紀)、奈麻礼 (新羅官名・繼体紀)、卒麻 (加羅・欽明紀)、弥麻沙・麻奇牟・木笏麻那・汶休麻那・己麻次 (百濟人・欽明紀)、佐魯麻都・己麻奴跪・奇麻 (百濟本記・百濟人・欽明紀)、麻奈文奴・昔麻帝弥 (百濟瓦博士・崇峻紀)、子麻呂 (高麗人・齋明紀)、久麻奴利城 (百濟・齋明紀)、久麻伎 (新羅官名・天武紀)、天智紀)、字麻 (耽羅人・天武紀)、大麻 (新羅官名・天武紀)、韓奈麻 (新羅官名・持統紀)
- と見えて、殆んどが百濟人名・地名の表記である。書紀に引用された百濟の古文獻、百濟記・百濟本記・百濟新撰に「麻」の仮名が使用されているのが注目される。「麻」は古く百濟で使

用されていた字音であると考えてよいように思われる。

「称」の漢字は韻鏡では「第十三開、舌音、上声、清濁、四等」に属しているので、中国音では、「ね」の音相は現れない筈である。一般の辞書には習慣音として「ね」を示しているが、これは上代で「称」が「ね」の音仮名として多用されたために付け加えられたものであろう。既に示した通り「称」の朝鮮音は「nje」でこの音が伝来すれば、当然「ね」の仮名として用いられる。ただこの仮名は古朝鮮では「祢軍」（百濟人・天智紀・三国史記七）と用例が少く、仮名としては日本で発達したものとと思われる。

「乃」の仮名は、推古朝遺文に、

等己弥居加斯支夜比弥乃弥己等（元興寺露銘） 有麻移乃
等己刀弥己等（〃） 未沙乃（〃） 阿米久爾意斯波留支
比里爾波乃弥己等（天寿国曼茶羅繡帳銘） 吉多斯比弥乃
弥己等（〃） 多至波奈等己比乃弥己等（〃） 弥居加斯
支移比弥乃弥己等（〃） 阿尼乃弥己等（〃） 蕪奈久羅
乃布等多麻斯岐乃弥己等（〃） 等己弥居加斯支移比弥乃
弥己等（〃） 等己乃弥弥乃弥己等（〃） 乎阿尼乃弥己
等（〃） 己乃斯里王（上宮太子系譜）

と見えて「の」の仮名として多用されている。「乃」は韻鏡では「外転第十三開、舌音、清濁、上声、一等」に属しており「の」の音相は導き難い。朝鮮音の「nei」によれば「の」(乙)になる説明は容易であるように思われる。古朝鮮では、

万頃県本百濟豆乃山県（三国史記三六）、利城県本百濟乃

利阿県（〃） 谷城郡本百濟欲乃郡（〃） 咸豊県本百濟

屈乃県（〃） 加知奈県一云加之奈（〃37） 進乃郡（百

濟国・三国史記三七） 乃代山郡（高麗国・三国史記三七）

乃賈県（〃） 骨乃斤県（〃三五） 中畿停本根乃停（〃

三四） 銳城本乃忽（〃三七）

と地名の表記に用いられている。新羅の郷歌に、

阿冬音乃叱好支賜鳥隱（暮竹旨郎歌）（美しく現れ給ひし）

兒史沙叱望阿乃（信忠柏樹歌）（姿を望み見れど）

必于化縁盡動賜隱乃（諸佛住世歌）

毛冬乃乎戸花判也（讚者婆郎歌）

毛等盡良白乎隱乃兮（稱讚如来歌）（集め尽きましを）

など用例があつて、「乃」は「na」の音として用いられている。ただ「白乎隱乃兮」の「乃」の場合のように「no」音としての使用も例外的に見られている。「乃」の「e」音が中舌音であるため「na」「no」に転用されたと思われる。百濟の地名に用いられた「豆乃」「欲乃」「屈乃」の「乃」は「城」（성）「豊」（덕）「頃」（경）に書き変えられたことから「no」音に使用されることもあつたと思われる。推古朝遺文で「乃」に当てているのは、百濟系字音であろうと思われる。書紀に「乃藥」（武烈紀）とあつて「乃」が「な」に用いられているのは、或いは新羅系字音であつたかと思われる。

「乎」は漢音コ、呉音クで「を」の音相と異にしている。推古遺文には、

乎阿尼乃弥己等（天寿国曼茶羅續帳銘） 乎沙多宮（^レ）
乎波利王（上宮太子系譜） 弥乎国（上宮記逸文）

と見えて「を」の仮名として用いられている。大野透氏は「助辞乎はその古義が感動助詞ヲに暗合するので自然ヲの最古の常用仮名に乎が用いられる様になったと考えられる」と述べておられる。であれば「乎」は訓仮名になるわけで音仮名の説明としては不当である。

古朝鮮での使用は新羅の郷歌に、乎は、

花昉折叱可獻乎理音如（老人獻花歌）

雲是毛冬乃乎戸花判也（讚耆婆郎歌）

祈以支白屋戸置内乎多（盲兒得眼歌）

慕呂白乎隱仏体前衣（礼敬諸仏歌）

など他にも多く見られている。「乎」の朝鮮音は「xo」であるが、円唇性のやや感じられるとして完全な「o」の音ではないが、「o」音として使用されている。この使用法が伝えられて「を」の音仮名として定着したものと思われる。

なお、都・布・苦・奴などの漢字については稿を改めたいと思う。

結びにかえて

これまでの考察の結果、万葉集の音仮名には漢音に類似があるもの、呉音に類似が見られるもの、漢音・呉音の何れにも類似しないものの三つの型が見られた。ところでこの万葉仮名が漢音に類似している場合も、この漢音と朝鮮音は類似し、万葉

仮名と呉音の類似が見られる場合、この呉音と朝鮮音とはほぼ類似していた。漢・呉両音に類似のない場合の万葉仮名にも朝鮮音との類似が見られていた。であれば、万葉仮名の基底には朝鮮音があると考えてよいであろう。表音文字、表語文字相混え用いる「表記法」も、「字音」も共に古朝鮮から多大の影響を受けているとされるべきであろう。朝鮮音が基底となっていると述べたが、その中に阿・麻・乃など百済系渡来人によって古く伝来し定着をみた仮名と、祢・芸などのように比較的新しく百済系以外の渡来人によって伝来したと思われる字音のあることも今後解明しなければならない問題であろう。

注(1)大野晋『古代日本人のことばと文字』言語生活二九二号

(座談会記録)

(2)拙稿『推古朝遺文の仮名と朝鮮漢字音——「之韻」に属する漢字を中心にして——』

鹿兒島大学法文学部紀要（文学科論集11号）

(3)拙稿『冬韻』に属する漢字について——朝鮮音の伝来に関して——』

国語国文薩摩路19号（鹿兒島大学法文学部国文研究室）

(4)拙稿『日本漢字音と朝鮮漢字音——「千字文」の漢字を中心にして——』鹿兒島大学法文学部紀要（文学科論集9号）

(5)注2に同じ

(6)拙稿『上代の音仮名と朝鮮漢字音——「曾撰」に属する漢字を中心にして——』 国語国文薩摩路20号

(7)大野透『万葉仮名の研究』一五一頁 明治書院

(8)郷歌には「乃」の用例が七例見える。

(9)注7に同じ 一九五頁

後記 拙い内容で真にお恥しい次第であるが、千田教授に代

って久松先生の御霊前に捧げ、先生の御冥福をお祈り申し
上げたいと思う。

追記 鹿児島大会の折、会場校の立場で御挨拶申し上げた法

文学部長石神兼文教授（民法担当）から、久松先生の御冥

福をお祈り申し上げる旨の伝言を受けている。ここに併せ

追記させていただきたいと思う。